

## 平成 21 年度 「大学授業研究会」 公開授業の実施報告

### 【公開授業】

- ◇開催日時：平成 21 年 6 月 9 日（火曜日）（午後 4 時 30 分～5 時 15 分）
- ◇場所：C-805 教室
- ◇実施者名：英語文化学科 M. K. ブルックス教授
- ◇科目名称：「リーディング I A」
- ◇対象クラス：大英 1 A 後半（受講者数 32 名）
- ◇参加教職員：43 名

### 【意見交換会】

- ◇開催日時：平成 21 年 6 月 9 日（火曜日）（午後 5 時 20 分～6 時 30 分）
- ◇開催場所：C-807 会議室
- ◇参加人数：28 名
- ◇通 訳：英文 辻 和成 教授
- ◇司会者氏名：英文 山田慎人 講師
- ◇記録者氏名：教務課 藤本泰子

## I 実施者による説明

私が考えるコミュニカティブの基本姿勢や手法について、その考え方を説明しておく。① 総合的 ② 双方向 ③ 伝達能力にむけた課題提供 の 3 つの原則を提示したい。私のゴール（目標）は、学生と一緒に言語を使うことである。

まず、1 つめの総合的について説明する。学生たちに読ませる、聞かせる、話させるといった作業の目的は、学生たちに考えさせる、書かせる、話させることにある。この手法は私たちが母国語を修得するときと同じ方法で、第 2 外国語を身に付けることができないか考え、あみ出した。今回の授業は、リーディングであるが、リーディングのみでなく、書く、聞く、話す、考えるといった総合的にすべてのスキルを磨くことにより、リーディングも向上すると考えている。

次に双方向については、楽しみを確立でき、聞く、見る、話すなど、授業の中では、60% くらい学生達に小グループの課題を与えたり、プレゼンテーション、ライティングやリスニングなどの作業をさせるようにして、授業に参画させるようにしている。一緒に作業をさせることができれば、授業に集中することができ、70% くらいは効果が現れる。しかし、その一つでもはずれると効果は 40% になってしまう。どうして双方向の授業が大切かといえば、言語の習得には、先生が情報を与え学生が受動するといった 1 方向の授業では攻略できず、総合的なアプローチが必要だと考えている。

最後に伝達能力の向上には、文法や談話の修得だけでなく、社会的要素や学術的要素も必要となる。本日は詳しく話せないが、そういった要素が必要であることを認識して欲しい。

学生たちが言語の習得を目指すとき、インタラクティブが重要な要素であると考えられる。双方向の授業を確立すると、先生からだけでなく、学生からも明確な反響を得ることができ、また、教師と学生が共有することによってより高い成果物となることができる。これをコラボティブと呼んでいる。



## II 意見交換

- ◇本日の公開授業では、非常に新鮮なことがいくつかあった。その一つは、学生と教員間の双方向のみではなく、学生間でも双方向となっている点である。私が日頃から先生方をお願いしている双方向は学生と教員間の双方向を考えていた。本日は学生同士の間でインタラクティブに行っているのが非常に新鮮であった。ベネッセコーポレーションが行った 10779 名の学生満足度調査によると、本学は 125 大学中、総合評価 4 位であった。しかしながら、仲間同士で助け合う、勉強し合うという項目の満足度が非常に低いということもあり、双方向の新しい発見ができ、感激した。本日の学生同士の双方向授業については今まで見たことが無く、新鮮に感じた。
- ◇本学では、教育実習に行く際には、教員が実習校に行き挨拶することになっている。その際に授業を見ることがあるが、本日のような授業は高校でも行っている。むしろ、中学生では生徒同士の方がよりアクティブな話をするところがある。
- ◇中学 1 年の 1 クラスを 2 つに分け、18 人で授業をしていて、小さいグループでアクティビティさせるので学生同士の双方向が生じている。
- ◇附属高校のスーパーイングリッシュコースでは、日本の英語の教科書を使い授業をしている。ペアワークなどを取り入れて、双方向の授業を行い、学生がお互いを評価できるような授業運営を心がけている。
- ◇学生間のコミュニケーションを授業で行おうとすると、学生がいつ話しているの

分からないといけない。そのタイミングを教員間でシェアできていなければ、学生がとまどってしまう。外国人の先生だと自然にできることも、日本人の先生では難しいこともある。また、学生は先生が変わるととたんに意見を言わなくなってしまうことがある。先生によって使い分けているようなことがある。学生が先生によって変わるのではなく、シチュエーションによって行うことができるように考える必要がある。

◇コミュニケーションはプロセスが大切で、外国人の教師、日本の教師というのではなく、そのやり方は個人の先生がそれぞれもっていらっしゃるのではないかと思う。私自身も試行錯誤してきた。日本の多くの学生は完璧に話せなければ、話さない方がましだと思っているので、私は学生同士ペアで作業させるところから始めた。そして小さいグループで作業させ、その後クラスで発表させるようにした。そのやり方が駄目なら次の方法を模索するなどして、試行錯誤の積み重ねが必要ではないかと思う。

◇本日の授業と同じクラスを教えているが、私の声は大きいですが、学生の声が小さくて双方向にならないため、ボイストレーニングを行った。大きな声を出すことで、自信につながるし、自信が出てくれば声も大きくなるのではないかと思う。本日の授業も学生の声が小さかった。テーマは面白かったが大学生としてもう少し深いところで話し合わせることができれば良かったのではないかと思い、少し残念であった。

◇確かに学生の声が小さくて聞こえないことがある。ボイストレーニングは有効な手段かもしれない。

◇先程、リーディングのクラスでも聞く、書く、話すこと等、総合的なスキルも取り入れることが必要だと言われていたが、すべての要素を使用するとリーディングに費やす時間が少なくなり、学生たちがこれはリーディングの時間であることを忘れがちになってしまうのではないか気になる。学生にどうしてこれはリーディングの時間であると意識付けているのか。

◇クラスの授業以外で読む課題を与えている。授業で初めて課題を読むことをしているのではなく、自信を持って発表できるように、自宅で準備して授業にのぞむと言う形をとっている。また小テストも行っている。最終的な結果だけを評価するのではなく、そこに至るプロセスを重視している。

◇クラス以外でも課題をかなり与えていらっしゃるようだが、言語には鮮度も必要であると思う。リーディングの授業のなかで文法の質問が学生から出たとき、どういう対応をされているか。

◇古い手法と新しい手法をバランスよく配置することで、学生たちにバランスをもって教えるべきだと思っている。リーディングの授業なので、スピーキングやライティングは重点的に行っていないが、すべてをバランスよく配置することで、実力が付くと思う。文法などはリーディングにも通じることであるし、全体の流れを指導した上で、その中で小さい点を理解させることが必要だと思う。会話している途中で、遮って間違いを正したりはしないが、さりげなく修正したりする。一通り読み終えた時点で、文法に戻って指導する。

◇大学を挙げて授業改革、双方向授業に取り組みたいと考えている。本日はランゲージの授業であったが、Listen、See、Say、Do といった日常生活の言葉を使用しておられた。正確性が要求される生物や数学においても、そのようなやり方で通用するのだろうか。

◇学習は到達目標のプロセスであると思っている。どのように学ぶかではなく、例えば数学の目標をどのように到達するか、レベルが高くなればなるほど、まず学生達に学習に対する自信を持たせることが必要だと思う。



#### Ⅲ まとめ（前原委員長）

本日の公開授業についての感想を述べる。次のことについて素晴らしいと思った。  
①学生の名前を覚えていらっしゃること。②学生の意識が明快だったこと。③学生ごとの場面を設定していること。④課題を明らかにし確認させていること。⑤コミュニケーションを重視する授業であったこと。⑥学生たちが笑顔でコミュニケーションしていること。⑦最後に質問の時間を設けていること。⑧今日は 45 分であったが、授業の流れが頭に入っていること。

どうしてこのような授業に到達されたのか、なにかトレーニングを受けられたのか、もっと聞きたいと思った。

今年度の大学授業研究会のテーマは私語のない双方向の授業の推進である。モデルとなる授業でスタートできたことをうれしく思う。今年度も双方向の授業の研究と実践に邁進してまいりたい。